

研究ノート

ヴァチカン圖書館訪書記（上）

福井文雅

二年ほど前から早稲田大學は特定課題に「國際共同研究」を新設し、國際會議等の準備・開催のグループに研究助成費を支給する處置をとるようになった。大變有り難いことである。幸いにも、蘆田孝昭教授（文學部・中國文學）を代表者とする「近世漢籍國際會議」の企畫・準備の申請が認可され、私もその一員として、研究が始まった。偶々フランスへ行く機會があったので、その研究の一環として、昨年十二月にイタリア・ヴァチカン圖書館を訪問した。ヴァチカン圖書館は立ち入りが至難、と言うことに一般にはなっている。そこで、これから行こうと志す好學の士の爲に、私の體驗を基に、入館・閱覽までの手續きを、讀者諸氏にお傳へすることにした。初歩的な案内なので、既に訪問出來た方には大し

た報告ではないであろうが、始めての方には、かなりの參考にはなる筈である。

ヴァチカン圖書館は、宣教師達が外國から持ち歸った貴重な書籍の寶庫でもある。十七世紀以降には、イエズス會を中心として、宣教師が中國（當時は明、清王朝）に行き、また長く滞在し、その途中で、或いは、歸國と共に、多くの近世漢籍類を持ち歸った可能性が大きい。しかし、本國の圖書館に漢籍を讀める司書がいることは稀であるから、折角の書物もそのまま圖書館の片隅に眠っている場合もあるのでないか？と云うのが、私共の見當であった。事實、フランスではパリ北方のリル市圖書館から、松原秀一慶大教授がレオン・ド・ローニの舊藏書を發見している例もあるのである。レオン・

ド・ローニとはパリの「中國日本學協會」(一八七三年創立)の初代協會長であり、また、一八七三年にパリで開かれた第一回國際東洋學會議で議長役を勤めている人物である。

従って、ヨーロッパの圖書館には未見の近世漢籍があるかも知れない、無ければ無いなりに、それもまた、一つの問題になる、と私共研究班は考えたのである。そこで、渡仏する私に、最初の下調べの役が當てられたのであった。

その話に先立って、渡仏の理由をも書いておかなければならない。公用だったからである。「文部省補助金による學者交換」と言う制度があり、日仏會館(東京・御茶の水)ではそれによって、毎年「學術使節」mission scientifique をフランスに派遣している。去年の十二月六日から二十日まで、その資格で私は渡仏することになった。その任務は、フランスの大學等で講演、セミナー等を開き、日本の研究状況をフランス學界に伝えることである。その詳細は『日佛東洋學會通信』11號に書いたものでここでは省略するが、講演等の任務を終えたあと、この滞佛の機會を利用して、イタリアのヴァチカン圖書館を訪問したのである。(フランス國內の圖書館も、パリからリヨン、ディジョン、リル等を幾つか訊ねたが、その状況については、別に書きたい。)

ヴァチカン圖書館訪書記(上)(福井)

一

ヴァチカン圖書館はローマ市に隣接するヴァチカン宮殿の中にある。従って、ローマの國際空港、レオナルド・ダ・ヴィンチ空港へ着いたならば、先ずは空港バスで終點まで乗る。その終點は、列車の中央驛である「ローマ終着驛」である。そこからは、タクシーでヴァチカン宮殿近くに豫約したホテルへ直行するのが良い。タクシーが來ない場合は、「ローマ終着驛」の地下から出る地下鐵に乗って終點まで行き、そこから歩く。終點からヴァチカン宮殿は十分足らずで行ける。と言うことは、ホテルまでも歩いて行ける、と言うことである。但し、イタリアは名打ての詐欺・泥棒の多い國、一人歩きの時はその注意が必要である。私は、フランス留學の頃から始めてイタリアへは度々行き、ヴェニスで下宿生活をしたこともあるが、何が起きてもおかしくない國ではない。全く気が抜けない。しかし、非難して言っているわけではない。それだけ人間味豊かな國とも言えるわけで、個人的には、大好きな國ではある。

不安な人は、空港バス終點、つまりローマ驛近くにホテルをとり、そこから、タクシーか地下鐵で通えば良い。唯、イ

タリアは晝休みが二時間と長いので、ホテルが圖書館から近ければ一旦歸宅して休めるが、遠い場合は諸事面倒になる。

ヴァチカン圖書館はイタリア語では *La Biblioteca Vaticana* (ラ・ビブリオテッカ・ヴァティカーナ) である。時には、單に *La Vaticana* (ラ・ヴァティカーナ) で通るが、他の語はともかく、少なくとも、このイタリア語だけは覚えておいた方が便利であろう。

開館は、朝の八時半から一時半まで。但し、旅行中の研究者は、午後も(晝休みの二時間ははずして)三時半から數時間は更に利用できる。日曜日が休館。

さて、そこへの行き方であるが、次のようである。まず、ヴァチカン宮殿に行くと、それはバルコニーを中心にして馬蹄形、扇形に広がっている。その有名な廣場に立つて正面のバルコニーに相對し、扇子の要めにいるつもりで右手を見るならば、ヴァチカン宮殿を取り巻く城壁が切れる方角に小さい城門が見える筈である。その通りが *Via Porta Angelica* (アンジェリカ門通り) である。その通りを左に沿って少し進んで最初に出會う左手の門が、圖書館への入口門である。濃紺の三本筋を袖に付けた三人の衛兵がいるので、

すぐ判る。因みに、ヴァチカン宮殿の美術館などへの入り口は、この門を過ぎた更に次の門である。

要するに *Via Porta Angelica* (アンジェリカ門通り) を見つけることが肝心である。通りの堺にそのプレートが着いているから、それを見つければすぐ判る。

さて、その門を入ると、すぐ右手横に受付の事務所がある。そこで、パスポートを提示すると所定の書類を渡されるから、それに書き込むと、入場許可證をくれる。書類の書き込み方が判らない時には、受付に各國語でモデルが備えてあるので、それを見せてもらえばさして困難ではない。

但し、ここに一つ問題がある。それは入館理由の欄と圖書館内での知人を書く欄とがあることである。ヴァチカンに入るのは至難、と言われるのは、もしかすると、これがある爲かもしれない。そこで、最初の人は、あらかじめ、内部の誰かに紹介を受け、事前に連絡を取っておいた方が無難であろう。私は、蘆田教授の紹介で知り合ったオックスフォードのヘリウェル司書を通して、既に日本にいる時からヴァチカンの司書長から紹介状が届いていたので問題は無かった。もしも誰の紹介も貰えない場合はどうするかであるが、日本での所屬機關長の正式の(と言うことは、當該箇所公式の便箋と封

筒使用の) 推薦状を持参すれば良いのではないか、と私は思っている。最悪の場合には、その場で然るべき研究理由を書き込んで、入場は可能であるような感じはしている。閲覧室に入ってみると、全部の閲覧者が館内の誰かの紹介状を貰って入ったとは、到底信じられなかったからである。尤も、自薦の場合には、かなり語學が出来なければなるまい。

さて、入場許可證を貰えたとするならば、今度はそれを持って、それまでの道を更に前方に二百メートルばかり真っ直ぐ進むと大きい城門があり、その下をくぐると、大きな中庭に出る。ここで行き止まりである。この中庭の右手先方の奥に小さな回轉式ドアが見えるが、それが圖書館入口である。

そこを入ると、すぐ右手に受付の門番がいるが、とりあえずはそれに構わずに、左手奥に見える Segretariato (事務局) を訪ねて來意を告げ、または紹介状を出して、そこでやっと正式の入庫證を作って貰うことになるのである。そこで聞かれることは、何日間利用したいか、と言う位のことである。

因みに、ここまでは英語でもなんとか通用するであろう。

その入庫證を貰ったならば、それを持って、改めて前記受付の門番のカウンターまで行き、入庫證と引換えにロッカー

の鍵を貰う。その鍵で、左手奥のロッカー室に荷物を入れ、再び門番の臺へ戻って、カウンター上のノートに鍵の番號・入庫の時間を書き、署名して、左手奥へ廻って、エレベーターで圖書室まで上る。(エレベーターが判らなければ、正面の立派な階段を臆面もなく登って行っても到着する。)

圖書室には受付カウンターがあるので、そこに鍵を預け、サインをする。但し、これは、圖書を借り出そうとする場合であって、單に圖書カードを見るだけであれば、その手續きの必要はない。

二

カード・ボックスは、閲覧室を入れて右手隣接の部屋に並んでいる。中國については三種類のカードがある。先ず普通のABC順でのカード箱には、イタリア語で、

Cina—istoria [中國—歴史]

とあって、中國に關する歐文の書籍をそこには収める。

それに對して、漢籍(刊本)には特別のカード・ボックスがあつて、それはカードの部屋の一番奥に別置されている。

「作者分析卡」の十一箱と「書名分析卡」の十三箱とに分かれています。カードの表記法は、漢字とそのウエード Wade 式

音寫とである。部首索引である。

寫本については、いったん閲覧室を出て左手の參考資料室に、蝶装ファイルのカードがある。その中に Borgiani Ciné-si〔ボルジア―ニー・チネージ〕1-533 (Inventario Pellicot〔インヴェンタリオ・ペリオ〕, 1922) とあるのを引くと、漢籍類の目録はその資料室内の512の本であることが判る。背表紙に、フランス語で

Pellicot-Manuscris et Imprimés de l'Extrême-Orient

〔ペリオ ― 極東の寫本と印刷物〕

とあるのがそれである。

實は、この512の目録が、ヴァチカン圖書館の漢籍(刊本・寫本)すべてに關する唯一の目録である。従つて要するに、今後の閲覧希望者は、以上述べたような手續きはふまずに、閲覧室にまで到着出來たならば、直ちに參考資料室に入つて、この512の圖書番號の目録を棚から出して見れば良いのである。

以上、ヴァチカン宮殿前の廣場から始まつて、この目録に到達するまでの順序を、これから行く人の爲に、かなりくどく書いてきた。今後の役に立てば幸いである。

なお、言葉は、門番や閲覧室カウンターなどでは、係員で

もほとんどイタリア語しか通じない。私は時間の關係から圖書の貸出しをする餘裕がなかったので、實際は判らないが、貸出しのカードもすべてイタリア語での説明であつたような記憶がある。

さて、その512番の目録『ペリオ―極東の寫本と印刷物』とは一體何であるのか? となるが、その説明と所藏漢籍については次號に述べることにした。

(續)